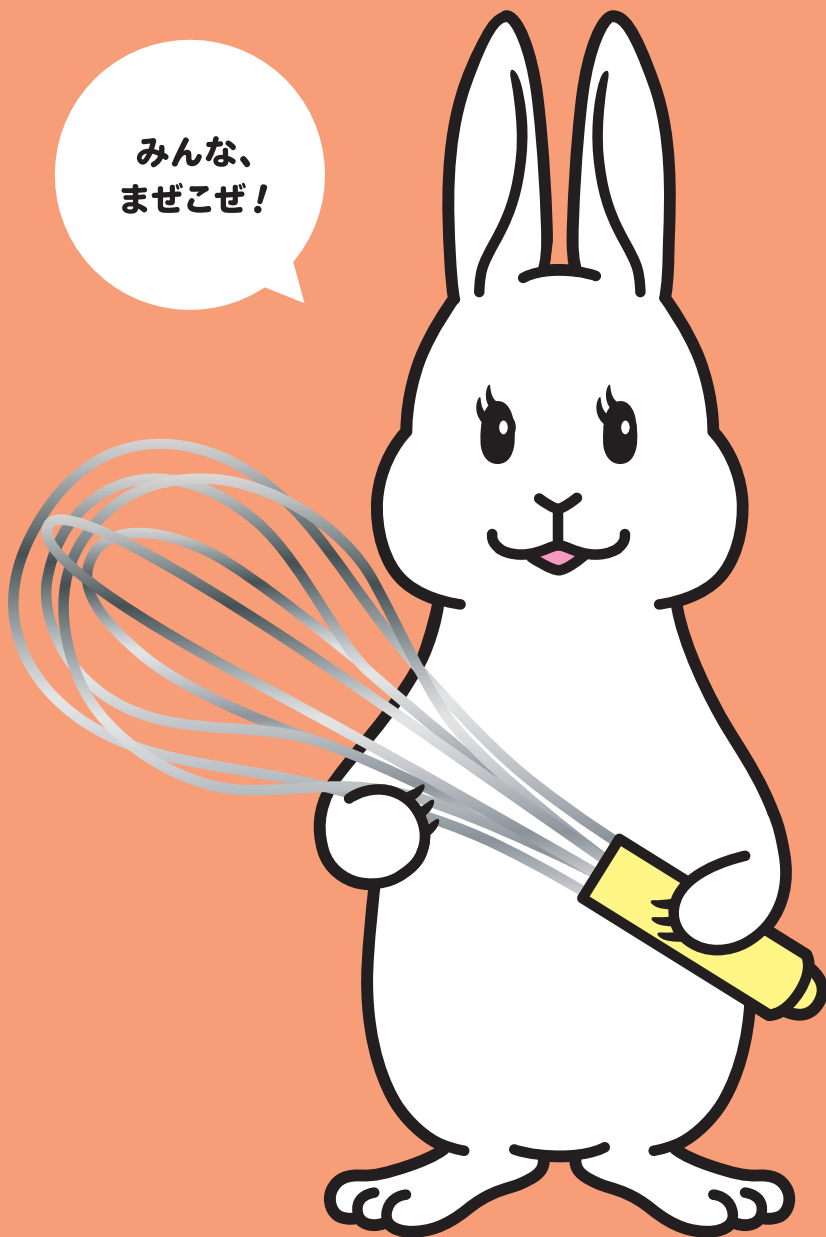


CarroMag.

みんな、
ませこぜ!



ワークショップ・レポート
ごちやませ演劇ワークショップ
2013-2016

(『キャロマグ』ってなに?)

三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」(600席)と「シアタートラム」(200席)という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、その活動は劇場での上演活動に留まりません。3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。キャロマグ(CarroMag.)は、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。



CarroMag.

Vol.11 | Mar.2017

CONTENTS

ワークショップ・レポート

ごちゃまぜ演劇ワークショップ2013-16

はじめに 2

「どなたでも」の演劇になることを願って

福西千砂都 (世田谷パブリックシアター学芸)

ごちゃまぜ演劇ワークショップ 全7企画、一挙紹介! 4

参加者レポート 10

インタビュー1

見方の違いというのがあれば、楽しめるのかなって

じゅんだい (「ごちゃまぜワークショップ」参加者)

インタビュー2

赤の他人の遊園地!

いぶき・ゆな (「ごちゃまぜワークショップ」参加者)

レポート

方向転換のきっかけ

はな (「ごちゃまぜワークショップ」参加者)

進行役レポート 14

小さな人と大きな人が劇場で出会うこと

瀬戸山美咲

新しい価値観や楽しみが自分に生まれる可能性

すずきこーた

CarroMag. Information

近日開催予定の主なイベント・ワークショップ 16

学芸スタッフから

おまけマンガ『たまにはこんな役 #11』

編集後記

「どなたでも」の演劇になることを願って

福西千砂都 (世田谷パブリックシアター学芸)

世田谷パブリックシアターで行う演劇ワークショップの多くは、対象を「どなたでも」としています。「どなたでも」とは、年齢、性別、国籍、障害の有無、そして、演劇が好きかどうかということすらも関係なく、地域に暮らす全ての人のことを指しています。演劇という営みには、自分自身や他者について考え、考えたことを他者に伝え、同様に他者から伝えられたことを受け止め、また考えて、考えたことを伝えて……という行為が含まれますが、その経験を多様な人々が集まる地域の人と重ねていくことで、より暮らしやすい地域をつくっていきけるのではないかと考えているからです(また、そうして生み出された演劇には、プロのつくる演劇とは異なる面白さがあります。劇場にとっては、そのような演劇を一緒につくることも大切な仕事です)。

とはいえ、ただ漠然と「どなたでも」ご参加くださいねとお知らせしても、演劇に興味のない人にとっては、そこに自分が含まれていると

感じることは難しいのではないのでしょうか。

例えば、「どなたでも」を対象にした演劇ワークショップ「デイ・イン・ザ・シアター」(以下「デイ」)は、その参加者の多くが「おとな」と呼ばれる人々でした。「デイ」は平日の夜や土日の午後など、様々な時間で行っており、中には子どもたちが参加できる時間帯のものもあるのですが、子どもやその保護者の方にとって、自分に関係のあるワークショップだと気付いてもらいにくかったのだと思います。

そこで、毎年、世田谷パブリックシアターが開館した4月5日に、劇場のお誕生日スペシャルとして実施している「デイ」が、ちょうど春休み中ということもあり、子ども版の「デイ」もやったらいいんじゃない? ということではじまったのが「ごちゃまぜ演劇ワークショップ」でした。小学生から20歳までの「子ども」なら「どなたでも」というワークショップです。あえて「子ども」と対象を区切ることで、彼ら



にも「どなたでも」のワークショップを届けたと考えました。

それまでも「子ども」対象のワークショップは行っていましたが、「小学生のための演劇ワークショップ(低学年コース/高学年コース)」や「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」など、学年で区切ったものでした。「ごちゃまぜ演劇ワークショップ」は、その区切りが「子ども」というさらに緩やかなものになり、普段の生活では接点の持ちにくい人々が集う場となっています。

私たちは、普段、年齢も性別も国籍も障害の有無も、ごちゃまぜな他者の中で暮らしています。他者の中には、気の合う人もいれば、合わない人もいます。できれば関わりたくない、という人もいるでしょう。けれど、同じ地域に暮らしている限り、互いに無関係ではられません。今、無関係だと思えているとしたら、それはただ、存在しているものを見ないようにしているだけなのではないのでしょうか。全員と仲良

くなる必要はありませんが、地域で暮らす個々にとってすべての人が存在するためには、最低限のやりとりは必要なのだと思います。劇場は、地域の一員として、演劇を通して地域と関わり、そのやりとりをするお手伝いをしたいと思っています。

あえて、対象を区切ったり(ワークショップの目的によっては、対象を年齢や興味・関心で区切った方が、より参加者の特性に合わせた内容に沿って深めていくことができるという利点もあります)、その区切りを少しだけ緩やかにしたり、あるいは広く「どなたでも」としたり、様々なアプローチを続けていくことで、いつか、演劇が「どなたでも」のものになることを願いつつ、今回は、その一歩としての「ごちゃまぜ演劇ワークショップ」をご紹介したいと思います。

ごちゃませ演劇 ワークショップ

全7企画、一挙紹介!

小学生から大学生まで、ませこぜになった子どもたち。
 いったいどんなふうワークショップは進んだのでしょうか？
 ぜひ、参加している気分で、お楽しみください!

ごちゃませ演劇ワークショップ ～子どもだヨ! 全員集合～

進行: 富永圭一 (abofa)、すずきこーた (演劇デザインギルド)、
 柏木陽 (NPO法人演劇百貨店)、大西由紀子 (NPO法人演劇百貨店)、とみやまあゆみ
 開催日: 2013年4月5日 (金) 13時～16時
 参加者: 13名 (小学生7名、中学生1名、高校生以上5名)

車座になって自己紹介。全員で、しゃべらないで背の順にならびかえたり、年齢順 (見た目) にならびかえたりしました。

年齢ごちゃませのグループに分かれて、身体を使ってものの形をつくったり、神社やお風呂場などの場所を表現したり。最後は、全員で「夜の遊園地」をつくりました。

小学校低学年、高学年 & 中学生、高校生以上の3グループに分かれて、「ウチの親」をテーマに短い演劇をつくりました。それぞれの年齢ごとに、「親」への見方が違った演劇が完成! お互いに見合ったあと、ふりかえりをしました。



ごちゃませ演劇ワークショップ ～子どもだヨ! 全員集合～

進行: 柏木陽 (NPO法人演劇百貨店)、大久保慎太郎
 開催日: 2013年11月23日 (土・祝) 13時～16時
 参加者: 14名 (小学生7名、中学生4名、高校生以上3名)

車座になって一人ずつ自己紹介。名前と、今、自分の中で流行っていることを話しました。

年齢ごちゃませの全員で、しゃべらないで、身長順や、年齢順、誕生日順にならびかえ。グループに分かれて、どのグループが身体をつかって一番長くつながれるか競争する「ながながゲーム」。

身体を使って、ものの形や場所、みんなが知っている物語のワンシーンを表現。

11月23日がグルジア (現: ジョージア) の祝日、ゲオルギウスの日であることから、聖ゲオルギウスの伝説を「英雄」「馬に乗っている」「血と赤いバラ」というキーワードをもとに、どんな伝説なのか想像して演劇をつくり発表! ふりかえりをして、おしまい。

ごちゃませ演劇ワークショップ ～子どもだヨ! 全員集合～

進行: 富永圭一 (abofa)
 開催日: 2014年12月26日 (金) 13時～16時、27日 (土) 10時30分～15時30分
 参加者: 16名 (小学生9名、中学生2名、高校生以上5名)

1日目

全員で車座になって自己紹介。

グループ対抗で、ならびかえる早さを競うゲーム「早並び」。背の順からはじまり、立ち幅で遠くまで跳べる順、嘘泣きが上手な順では、答え合わせで大盛り上がり。

身体をつかってものの形や場所を表現。最後にグループで「おいしそうな鍋の中」をつくって発表。

★宿題: もらって嬉しかったもの、あげるのを忘れちゃったもの、お願いしていたものと違ったこと、イマイチ喜んでもらえなかったこと……などなど、プレゼントにまつわるエピソードを思い出してくる!

2日目

思い出してきたプレゼントにまつわるエピソードを絵に描いて、ひとりずつ発表。

3つのグループに分かれ、一緒のグループになった人のエピソードを全部ごちゃませにして、一つのお話を考え、演劇にして発表。見ていた人に感想を聞きました。

感想や意見をもとに、つくりなおして再び発表とふりかえり。



伝説を想像して演劇に



ごちゃまぜ演劇ワークショップ ～おかしなまちづくりプロジェクト～

進行: すぎきこた (演劇デザインギルド)
開催日: 2016年1月6日(金)、7日(木) 10時～16時
参加者: 17名 (小学生10名、中学生3名、高校生以上4名)

1日目

みんなで車座になって、自己紹介代わりの「なんでもバスケット」。それから名前を覚えるゲームや、みんなで手をぐちゃぐちゃにつないだところから、ひとつの輪になるようほどこいていく「人間の知恵の輪」など、いくつかのゲームで遊びました。

ひとりずつ、「おかしな家」の設計を開始。「おかしな家」の材料となるクッキーの型紙をつくってから小学生、中学生、高校生以上のグループにわかれて、クッキーを作りました！ 焼き上がったクッキーをアイシングで組み立てて、「おかしな家」の完成。

年齢ごちゃまぜのグループにわかれて、身体で色々なものの形を作りました。できあがった「おかしな家」は、食べないでそのままとっておいて、2日目の「おかしなまち」に持ち帰りましょう！

2日目

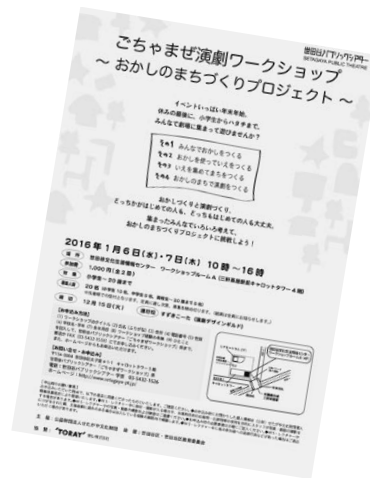
まず名前をつかったゲーム。そのあと、1日目の最後にやった、身体で色々なものの形を作ることの続きをしました。それから、年齢ごちゃまぜのグループにわかれて、クッキーがつくられていくところを身体をつかって演劇にしました。

グループごとに、メンバーがつくった「おかしな家」を持ちよって「おかしなまち」を作りました。砂漠のまちや、海辺のまち、ホラーハウスのまちが誕生！

いよいよ、「おかしなまち」を舞台にした演劇づくり。そのときに、クッキーがつくられるところの演劇を入れこみました。グループごとに発表して、見たひとの意見を聞いて、もう一度つくりなおし。最後に、保護者や友達の前で発表しました！ 2日間をふりかえって、おしまい。

おかしな家づくります

演劇の舞台は
おかしなまち！



ごちゃまぜ演劇ワークショップ ～子どもも歩けば劇にあたる～

進行: 瀬戸山美咲 (ミナモザ主宰・劇作家・演出家)、山本雅幸 (俳優・青年団/スイッチ総研所属)
開催日: 2016年3月30日(水)～4月1日(金) 10時30分～16時
参加者: 23名 (小学生12名、中学生6名、高校生以上5名)

1日目

みんなで車座になって、拍手を隣の人に飛ばしていく「拍手回し」、動きをつけて自分のニックネームを言う「ネームウィズアクション」、みんなでぐちゃぐちゃにつないだ手をほどこいていく「人間の知恵の輪」など、いろいろなゲームで遊んだあと、カルタをやってみました。

その後、4グループにわかれ、カメラを持って町あるき。気になるものに、必ずチームの誰かを映りこませて写真撮影、1グループ100枚以上、撮りました！

2日目

1グループにつき15枚まで写真を厳選。その写真1枚につき、「あ」や「げ」「にゃ」などを書いた60音分の丸い紙を1枚割り当て、その音からはじまる読み札をグループで考えました。

完成したカルタで遊び、とった札をそれぞれ持ってグループ替え。集まった札の中から3枚選び、その3枚の写真を真似して、身体で絵をつくってみました。

その3つの絵をつなげて、ひとつの演劇をつくりはじめました。

3日目

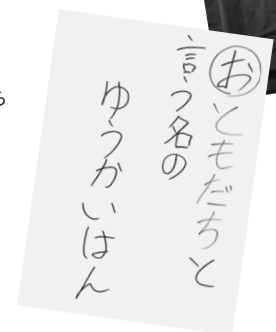
前日から引き続き、グループで演劇をつくりました。中間発表を行い、それぞれ感想を言い合い、つくりなおし。

保護者やお友達の前で演劇を発表！ 自分たちでつくったカルタを紹介したり、カルタで遊ぶところも見てもらいました。最後に3日間のふりかえり。

カルタづくりと
まちあるき



カルタから作品を
つくる！



ごちゃませ演劇ワークショップ ～未成年の主張～

進行：富永圭一 (abofa)
開催日：2016年8月30日(火)、31日(水) 10時30分～16時
参加者：16名 (小学生10名、中学生4名、高校生以上2名)

1日目

みんなで車座になって、「拍手回し」と、全員の呼ばれたい名前を覚えるゲーム。それから、グループごとに、誕生日順や背の順に喋らないで並びかえる「早並び」や、伝言ゲームの応用編「くまがきた」で遊びました。

「大人によく注意されること」をひとりずつ、言葉や絵で紙にかき、順番で紹介。「お風呂にはいりなさい!」や「他の人をじっと見ないの!」「普通ならこうするでしょ」などなど。

身体で色々なものの形をつくりました。最後に、年齢ごちゃませのグループで「おいしそうなアイスクリーム」をつくり、それが溶けるところまで、身体で表現。「注意されること」の続きは、また明日!

2日目

みんなの名前を復習して、「拍手回し」と「だるまさんがころんだ」で遊びました。

『りゆうがあります』(作・絵：ヨシタケシンスケ)を読んで、1日目にかけた「大人によく注意されること」について、自分たちなりの理由を考えました。たとえば「他の人をじっと見ないの」と注意されたら、「心の中でその人と会話をしているから!」って言い返そう!

年齢ごちゃませのグループにわかれて、「大人によく注意されること」と、それに対する理由が入った演劇をつくって発表。2グループずつ合体し、それぞれがつくった演劇も合体させて、さらに発表。見た人から感想をもらって、もう一度演劇をつくりなおして、3回目の発表! 最後に2日間をふりかえりました。

自分なりの理由を
考えてみる



ごちゃませ演劇ワークショップ ～メロンじゃないけどメロンパン～

進行：すずきこーた (演劇デザインギルド)
開催日：2017年1月6日(金)、7日(土) 10時～16時
参加者：19名 (小学生15名、中学生3名、高校生以上1名)

1日目

みんなで車座になって名前を覚えるゲームをしたり、自己紹介の代わりに「なんでもバスケット」で遊びました。

小学校低学年チーム、中学年チーム、高学年チーム、中高生チームにわかれて、「メロンパン」づくり。1回目はプレーン生地のメロンパン。2回目は、ココアパウダーや抹茶パウダーもつかって、色々な色や形のメロンパンを焼きました。

メロンパンづくりのなかで、印象に残ったことの絵をかいて、ひとりずつ発表。最後に、身体をつかって色々なものの形を表現して遊んでから、また明日!

2日目

「なんでもバスケット」や「リズム遊び」をしてから、まずは身体で色々なものの形をつくりました。それから、1日目の学年別のチームで、メロンパンがつくられるところを身体で表現。

年齢ごちゃませのチームにわかれて、「メロンパン」の出る演劇を考えました。ルールは、さっき身体で表現したメロンパンがつくられる場面も入れること! お昼休みを挟んで練習して発表。

他のグループのひとからの意見を参考につくりなおして、また発表。最後にもうひと工夫してから、保護者やお友達の前でも発表! 2日間をふりかえってから、メロンパンを食べました。

メロンパンづくりを
表現!



「ごちゃまぜワークショップ」の参加者たちは、

どんな感想をもっているのか知りたい！

ということで、高校生からははな、中学生からはじゅんだい、小学生からは兄妹のいぶきとゆなに、その感想を聞きました。

*インタビューの聞き手は、学芸スタッフのふくちゃんです。

インタビュー Interview 1

見方の違いというのがあれば、 楽しめるのかなって

じゅんだい

中学1年生。『子どもだよ!全員集合』(4/5)『おかしなまちづくりプロジェクト』
『子どもも歩けば劇にあたる』『未成年の主張』『メロンじゃないけどメロンパン』参加者

—じゅんだいて、何年生まれだっけ？

じゅんだい 2003年です。

—2003年！大人に静かな衝撃が(笑)。じゅんだいはこれまで「ごちゃまぜWS」や他のWSに何回か参加してるけど、最初は7歳のときなのかな。参加してみようと思ったきっかけは？

じゅんだい お母さんが、「WSの予約しておいたから行ってねー」みたいな感じで。『子どもだよ!全員集合』のタイトルを見て、楽しそうだなって思ったのを覚えています。—タイトルからして、企画した人間の年齢が見えるね(笑)。参加した印象を聞かせられる？

じゅんだい 年齢が離れてても、一緒に体を動かしたり、話し合ったりしていれば、仲良くなれるっていうのが楽しいかな。あと、話していると「あー、わかる！」みたいなこと

があって、自分と似てる感じの人が集まっていた気がして、居心地がよかった気がする。

—傍目には、みんなバラバラだなんて思うけどね。

じゅんだい 逆に、バラバラだから居心地がいいのかな？『メロンじゃないけどメロンパン』でも小学生の300円と中学生のひらいしん(「300円」「ひらいしん」は参加者のニックネーム)がすごく仲良くしてて、きつと惹かれ合うなにかがあるんだろうね。学校とはちがって、年齢の垣根がフリーになるから、変にかしこまらなくていいし、自由に接することができると思う。

—じゅんだいが小学生で「ごちゃまぜWS」に出ていたとき、大学生もいたよね。

じゅんだい ほぼ大人、みたいな人も来てたよね。

—大学生って、大人って感じる？

じゅんだい そのときはすごくそう感じた。小2とか小3の頃の自分からすると、高学年とかでも、ものすごく大きな存在だったんで。『おかしなまちづくりプロジェクト』に参加したときは、僕、小6くらいだったんだけど、背が大きいから「高校生チームに行って」とか言われて。そんなときはチーム内で圧を感じた(笑)。つくったことのないクッキーを、謎な人たちと……みたいな。

—じゅんだいなら大丈夫だろうって(笑)。『おかしなまちづくり』のときは、実際にクッキーをつかって、そのクッキーで「おかしないえ」をつかって、そのいえを集めて「おかしなまち」をつくったんだけど、まずはクッキーをつかった経験を劇にしようとかやったよね。

じゅんだい 「小麦粉、ふるいますー」とか「卵、入りますー」みたい



なのを、わーって踊りで表現したりね。
クッキーのつくり方っていう同じ課題でも、人によって違う演じ方あって、それを見ているうちに、本当にそう見えてくるのがすごいなって。そういう意味だと、人それぞれの個性があるっていうのがわかった。なんでこの人、こんなことをするんだろうって思ったことでも、向こうには向こうなりの事情があるから。その人なりの経験とか考え方とか、見方があるんだって。見方が広がったかな。
僕も小さい頃は、自分はこれやりたい！って感じだったんですけど、

最近は見方を広げて、自分だけじゃなくて、みんなはどれをやりたいのかっていうことから考えます。
——なんか、おとな！このWSのどんなところが楽しい？
じゅんだい 遊んでいたら、みんなですごいものができちゃった、みたいな感じが楽しいかな。ときどきすごい考えが飛んできて、それにみんなでもいいね！ってなって、「じゃあ、やろう！」って感じで、トントン拍子でできる。どうしよう、どうしようってずっと悩んでいるよりも、まず体を動かしてみよう、みたいな。
——みんな、つくるの早いもんね。
じゅんだい でも、この前の『メロ

ンパン』のとき、小学生が「こうやろう！」って言ったのに、ついていけない自分がいて。その発想に押されるっていうか。自分ももう少し前だったら、こんな発想できたのかなって思ったりする。発想力の衰えて、今度のWS (3/30,31実施の『春風とともにざわざわことわざ』のこと。16ページ参照)では、正直ついていけるかなって思っていたけど、さっき自分で言いながら思ったのは、見方の違いというのがあれば、楽しめるのかなって。変に難しく考えすぎないで、楽しく体を動かそうって。

インタビュー Interview 2

赤の他人の遊園地！

いぶき

小学6年生。『子どもだヨ！全員集合』（4/5、11/23）『メロンじゃないけどメロンパン』参加者

ゆな

小学4年生。『子どもだヨ！全員集合』（4/5、11/23、12/26-27）『未成年の主張』『メロンじゃないけどメロンパン』参加者

——「ごちゃまぜWS」は、ゆなちゃんが1年生、お兄ちゃんのいぶきくんが3年生になるときに、参加してくれたんだよね。やってみてどうだった？
いぶき ほぼ遊びって感じだった。
ゆな うん。もうちょっとちゃんとやると思った。
——ははは、すみません。もうちょっとちゃんと何をやるって思ったの？
ゆな ちゃんとつくるって思った。劇を最初から。
——つくるっていうのは、どうい

う感じのことをさしているの。
ゆな たとえば『メロンパン』のときだとすると、テーマとかをふくめてつくっていくと思ったら、ゲームしてた。
いぶき 基本的にゲームって感じ。知らない人とみんなで遊べる、赤の他人の遊園地だね。
——赤の他人の遊園地かー。面白い言葉だね。赤の他人となんかをするのって緊張しない？
ゆな 知らない人のほうが楽しい。学校だと、変な意見とかあっさり取り入れられないじゃん。どういう人

かも全部、知っちゃってるし。
——知らない人のほうが変なことを言いやすい？
ゆな うん。そうだし、どんな意見を出しても、みんな考えてくれるよね。
——ごちゃまぜのときってけっこう大きい人もいるよね。そういうのってどう？
いぶき 年上の人とも話せるし、あんまり関係ないかな。
——WSのときは、ふたりともバラバラのチームになっちゃうけど、不安じゃない？

いぶき・ゆな 一緒のチームになりたくないし。
——どうして？
いぶき・ゆな 喧嘩するから。
——どうして喧嘩するの？
いぶき・ゆな 意見が合わないから。
——めっちゃ、意見が合ってるよ(笑)。意見が合わない人って、兄妹以外にもいるでしょ。そのときは、どうするの。
ゆな どっちかが負ける。
——負けるっていうのは、諦めるっ

てこと？
ゆな そう。
——じゃあ、WSのときに、意見が合わなくて大変だなーみたいにはならないの？
いぶき 意見をあまり出さないから。
——意見を出さないけど、出したくなって思ったりする？
いぶき 「こういうこともあるよ」ってたまにいう感じかな。言いたくなったら言うって感じ。
ゆな いろんな意見がバンバン出てきて、その中の一部が、自分と同じ

だったりするから、それでもういっかーみたいなの。
——それはそれで嫌じゃないの？
ゆな 嫌じゃないよ。それでふつうにできてっちゃうから。賛成だったら賛成って言うし、違ったら、こうしたらって言う。こうしたらって言うって、そうなるときとなんないときがあるかな。
——そっか。自分の意見と違うことも、ちゃんと受け入れてるんだね。

方向転換のきっかけ レポート Report

はな

高校1年生。『未成年の主張』『メロンじゃないけどメロンパン』参加者

『未成年の主張』と『メロンじゃないけどメロンパン』の2回、参加しました。
『未成年の主張』では、自分がいつも注意されたり怒られたりすることを出しあっていることをやりました。その時、周りの人たちが面白い言い訳を次々と考えだしたのに対して、私は面白味のない回答しかできず歯がゆい思いをしたのですが、そのこと自体が私にとっては新鮮な驚きでした。私も、同じようにできると思っていたからです。
知識に囚われず沢山のことを思いつく小学生を見て、私は知識に囚われたつまらない人間になってきていると思いました。そしてそのことは、私が今から方向転換してつまらなくない人になりたいと考えるき

かけにもなりました。
『メロンじゃないけどメロンパン』では、年齢も生活環境も違う人たちと劇をつくったので、少し疲れました。けれど、そういう人たちと話し合いをする中で、意見が対立したりまとまったりしているのを見て、私はみんな多様な生活をしているんだなあと思いました。また、私たちの普段の生活では、価値観の違う人と話し合う機会があまりないのだなとも感じました。
メロンパンはおいしかったです。
このふたつのワークショップを受けている間、私は、普段、考えている将来のことや自分の趣味のことから抜け出したような、ふしぎな気持ちでした。普段はしないような話もできて、楽しかったです。
もっと高校生が来てくれるといいなあ。

小さな人と大きな人が 劇場で出会うこと

瀬戸山美咲 (劇作家・演出家/ミナモザ 主宰)

『子どもも歩けば劇にあたる』は、街を歩いて写真を撮って、カルタをつくり、演劇をつくるというワークショップでした。参加者は小学校1年生から20歳まで。年齢差があるからこそ面白さにあふれていました。

初日は、街に出て写真を撮りました。まずひやひやしたのは、車の行き交う道を渡ること。小学1年生の動きは予測不能です。しかし、そこは高校生たちが活躍。小さな人たちと手をつないで先に進みます。しかし、高校生だけのときのようにスムーズにはいきません。小さな人たちは遊具があれば遊び、木があれば登る。写真も撮り出すと同じものを撮り続ける。大きな人たちは根気よく待ちました。三歩進んで二歩下がることを繰り返しながら、なんとか劇場へ帰還。撮影した写真は3チームで400枚に上りました。

2日目は引き伸ばした写真に無作為に50音をあてはめていき、写真と文字から読み札を考えました。こうして出来上がったカルタで遊び、取った札をもとに演劇をつくります。難しいと感じたのは、意外にもカルタ遊びの部分でした。どうしても大きな人のほうが有利になってしまうのです。小さな人が取りやすいように読み手に調整してもらおうとしましたが、途中で違うかもしれない気づきました。読み札を考える「発想」には年齢による差はなく、あるのは個人個人の違いです。しかしカルタを取るという「競争」になるとどうしても年齢による差が出てしまう。仮にここに大人がいたら、自主的に手加減するかもしれません。しかし、そこは中

せとやま・みさき/世田谷パブリックシアターのワークショップや、ロンドンパブシアター『ヒロシマの孫たち』など、コミュニティの人とつくる演劇にも継続的に携わる。動物愛護センターを描いたリーディング劇『ファミリー』を世田谷区内の小中学校で上演中。

学生・高校生。本気で勝ちにいきます。そのことは悪くないと思いました。能力差を前提にしながらみんなで楽しく遊ぶ方法については、これからも考えたいと思います。

劇づくりでは小さな人たちが大活躍しました。斜め上をいく発想力で大きな人たちを巻き込んでいきます。みんな自分の意見をきちんと言っていたのが印象的でした。それは中学生以上の人たちが「聞く」ことができていたのが大きいのです。私がこれまで別のワークショップで会ったことのある高校生たちも、同世代だけのときより、人の話を聞いていたのが印象的でした。喋るのが得意でない小さな人の言葉も一生懸命聞き出そうとしていました。

出来上がった作品はどれも奇想天外で、楽しいものでした。演じる際には、大きな人が電柱になって、小さな人が隠れるなど、それぞれの「からだのちがいを」生かしたキャストイングが見事でした。

学校などでは、基本的に同世代としか話をしません。その場合は共通言語があるので「ノリ」でなんとかなる部分もあります。しかし、異なる学年と交流するときはそうはいきません。また、学校では他学年と交流するとき、どこか上下関係が生じます。しかし、劇場での関係はフラット。小さな人は大きな人に学び、大きな人は小さな人に学ぶ。自分とは違う人と出会い、向き合うというコミュニケーションの基本が自然とおこなえる「ごちゃまぜワークショップ」はとても貴重な場だと思いました。

新しい価値観や楽しみが 自分に生まれる可能性

すずきこーた (演劇デザインギルド)

私たちは同じ(と思われる)仲間グループを組みたがります。安心できるからです。学年、性、国籍、趣味、境遇、身体的特徴…。少しずつ線を引き、壁を作ります。私にだって線をひいたり、バイアス(偏り)がかかることが少なからずあります。意識していても、いつの間にかバイアスはかかってしまうのです。そしてそれは「区別」につながり、「区別」は「差別」へとつながっていきやすいものです。

世田谷パブリックシアターの入り口近くに「劇場は広場」と書かれているように、私たちは、いろいろな価値観やバックボーンを持った人たちがつどい、尊重し合い、協働作業をする広場となるワークショップ(以下WS)の場をつくりたいと考え、あえて「ごちゃまぜ」とうたった(小学生から大学生までを対象にした)WSを行うことにしました。

ごちゃまぜWSを始めて、私には興味深い発見がありました。「年上だから我慢したり(年長者として振る舞ったり)、逆に意見を押し通してしまう」ことや「年下だから意見を言えなかったり、わがままを言う」ということはなく、また「互いの面白がるポイントを楽しめない」ということもありませんでした。参加者は共に楽しめる落とし所を探し始めたのです。自分が面白いと思うことを相手にぶつけ、時に受け入れてもらい、時に跳ね返されながら、共により良いエンゲキを目指して活動していたのです。そこには年齢の壁はなく、逆に「ごちゃまぜ」でない学年で区切ったWSの時こそ、線引きが始まり壁がつくれ、目に見えないグルー

プ分けが起こるように感じられたのです。

私は、学校でもWSを数多くやっていますが、小学校で「縦割り班」という言葉をよく目にします。多くの学校の「縦割り班」とは、1年生から6年生まで、各学年2~3人程度、合計で12人前後の児童で構成される班で、その班と一緒に遊ぶというのが基本的な考えです。学年を超えて一緒に遊ぶことから学ぶことが多いと先生方が考えているからでしょう。そのような想いは、地域や劇場にもあり(少なくとも私にはあり)、そのことが「ごちゃまぜ」や「縦割り班」として現れているのではないかと思います。

学年や性別、趣味が似ている人などで集る場をつくるエンゲキは、共有できることが多いし、楽しいことがすぐにできます。そういう場も必要だけど、そうではない場も必要なんだと、今は考えます(興味が似ているからこそ少しの違いが気になったりしますね)。他のことに興味のある人、他の視点で物事を観られる人と一緒にやることによって、新しい価値観や楽しみが自分に生まれる可能性があると思いますからです。

本来なら何も言わなくても他者を認め、尊重し合い、共存できると思いますが、なかなかそうなりにくい状況も社会にはあります。とするなら、いろんな人が集れる場をつくり、いろんな意見がある場に慣れた子どもたちが大人になって社会に出ていけるきっかけをつくれる場になりうる「ごちゃまぜ」WSは、これからもっと大きな意味を持つものになるかもしれません。

すずき・こーた/「からだや声を使って、楽しみながら、考えたり、発見してみよう!」と、演劇を使って様々なことに取り組むワークショップを数多く進行。教育現場や多文化共生の現場にも積極的に関わる。お菓子づくり、ピニャータづくり、絵本を読む、散歩に行く、絵を描く、段ボール箱を積み上げる、聞き書きするなど、多様なアプローチも特徴。



近日開催予定の主なイベント・ワークショップ



『ごちゃまぜ演劇ワークショップ ～春風とともにざわざわことわざ』

日程…2017年3月30日(木)、31日(金)10時～16時
対象…小学生～20歳まで(2017年3月30日時点)
参加費…1,000円
会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

日本にはたくさんのことわざがあります。世界にはもっとたくさんのことわざがあります。二階から目薬(日本)、ゾウにまたがりバツを捕る(タイ)、ヨーグルトは医者へ行かない(ブルガリア)。よく考えるとちょっとおかしい言葉たち。でも、たしかに、うーんなるほど。どんな時に使うかな?あれこれ新しいことわざもうまれちゃうかも。はじめての人も、そうじゃない人も、みんなで、それぞれで、話して、考えて、ことわざで演劇してみよう!



『デイ・イン・ザ・シアター ～20回目のお誕生日特別編～』

日程…2017年4月5日(水)19時～21時半
対象…どなたでも
参加費…500円
会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

普段はなかなか入れない、劇場の地下にある稽古場で、おしゃべりしながら体と頭を使って遊んでみます。みんなでわいわい遊んでいるうちに、劇場や演劇が、今までより少し身近に感じられる……かもしれません。演劇にちょっと触れてみたい、稽古場に入りたい、仕事帰りになんか面白いことやってみたい、どんな方でも大歓迎。世田谷パブリックシアター開館20周年を迎える記念日、4月5日のスペシャルワークショップです!

学芸スタッフから

★「またね」という言葉が好きです。WSの最後に全員で手をつないで一つの輪をつくり「またね」と言いつつぐるりと回って外を向く、ということをする時があるのですが、本当にまた会えるかは重要でなく、その言葉を発したときの「また会いたいね」という願いとか、そう思える人や場に出会えたことが、幸せだと思います。[ふく]

★カメラ・レンズ収集にはまっています。古いものは1960年代のずっしりしたカメラ、おもちゃのようなプラスチックのカメラ、最新式のデジタルカメラ。ジャンク品は分解、清掃したら組立てて、使えるかどうか試します。自宅の作業机は、壊れたものも、使えるものも、ごちゃまぜになっています。[たば]

たまにはこんな役 #11



編集後記

本誌の創刊から編集されてきた演劇批評家の藤原ちからさんより、バトンをお預かりした編集者のかおるです。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今号の「ごちゃまぜ演劇ワークショップ」、いかがでしたか。「ごちゃまぜ」というのは、少し前からよく耳にするダイバーシティ(多様性)とか、インクルージョン(包摂)という言葉の沿線にあるのかなと思います。「お互いの違いを尊重し合い、共生する」ということですね。とても素敵な言葉だと思うのですが、長らくこの言葉を聞く度にモヤモヤしてしまう自分がいました。辿り着きたいゴールだけは見えるのだけど、そこへの行き方が皆目わからない…でも、個々が自分の違いを探り、それを相手に伝え、受け取り合うという今回のWSのプロセスを知って、なんとなく道筋が見えたような気がするんです。そのプロセスはこんなふうに言葉で書くほど簡単なことではないと思いますが、「場」さえあれば、意外と人は、個々の違いを自然に受け入れ、楽しめることができるのかもしれないです。むしろ難しいのは、そういう場をつくり、支えていくことなのかもしれません。

さて、この春、学芸スタッフのふくちゃんが、学校の先生になるそうです。ふくちゃんがこれからつくり、支える教室のことを想像すると、なんだか胸がわくわくします。[かおるこ]

[キャラマガ]

Vol.11 / Mar.2017

発行日
2017年3月27日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
http://setagaya-pt.jp

編集
大谷薫子(本のモ・クシュラ株式会社)

企画
恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

デザイン
株式会社ウチカワデザイン
山中楓子、中西珠己

印刷・製本
株式会社リヒトプランニング

協賛
TORAY 東レ株式会社

後援
世田谷区

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財)せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター(約600席)、シアタートラム(約200席)の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター(主劇場)



シアタートラム(小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ **世田谷パブリックシアター**

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階

Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559

<http://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。